

## 創造的学び方

主体性、創造性の育成という課題が教育の重要目標のひとつであることは、いつの時代にも、またこの国においても変わらないことです。しかしながら、わが国の、昭和の時代に入ってから学校教育の歴史を概観してみた場合に、最近の10年ないし15年間ほど、そのことが強調されていることはないように思われます。そのことは、小学校や中学校における教師が個人的あるいは共同的に行う教育研究の主題として選定している課題のなかに、主体性、創造性の育成に関するものがいかに多いかということからもうかがえます。そしてそれにはそれなりの理由があると思うのです。すなわち、戦後における科学技術の急激な発達、最近10年ないし15年間における経済社会の過度なまでの成長、そして激烈な進学競争とそのため知育偏重的な教育への傾斜などの社会的流れのなかで、教育の現状を反省するとき、主体性や創造性の育成という本質的課題が再確認されてきたからであると考えます。

私たちの福岡教育大学附属久留米小学校においても、このような、教育の現代的課題についての認識にもとずいて、昭和38年度から3ヶ年間「主体性を育てる学習過程」(昭和41年、明治図書刊)という主題のもとに実践と研究を行ってきました。そして昭和42年度からはそれを発展させて創造性の育成という課題にとりくむことになり、その研究は現在まで続けられています。その過程において、昭和44年には「主体性から創造性への学習過程」(明治図書刊)として、また昭和47年には「創造性を育てる学習指導の方略」(明治図書刊)という主題でささやかながらその成果を公にしてきました。

これら9ヶ年間の、本校における研究の流れをお考えいただきますと、学習という子どもたちのいとなみの中核をなすものがひとりひとりの主体性であり、それをいかに育成していくかが教育の主軸であるという思想、そしてそれを根底にすえながら創造性の育成を意図し、そのための指導のあり方を究明していき本校の主眼がご理解いただけるものと思います。そのなかで、とくに前著「創造性を育てる学習指導の方略」におきましては、情報を階層的に生かせるような教材の構造化と思考過程の究明および子ども自ら学ぶようにする学習指導過程の明確化を主体として研究してきました。それは「学習指導の方略」という標題も示しているように、教師の側に立った究明が中心であったといえます。しかし、学習といういとなみの主体は子どもであるという基本的な考え方において反省するとき、おのずから私たちの研究の主目標は子どもたちの「学び方」の究明とその指導に指向していきました。

本著はこのような研究の流れと主旨にもとずいて3ヶ年間わたしたちが積み上げてまいりました実践的研究の成果をまとめたものです。そのなかで私たちは、子どもたちが現在までにもっている考えや過去において身につけた行為をもとにして、新しい考えや行為をつくりだしていく学び方を重視してまいりました。そしてその学び方の最も適切な姿として協調という働きを協調しております。すなわち、協調とは過去および現在において子どもたちひとりひとりがもっているいろいろな考えや行為あるいは経験内容を最適に結び付けて、その子どもが目指す新しい考えや行為をつくりだしていくことであると私たちは定義づけています。そしてその協調のタイプとしては、加法による協調、順序による協調、対応による協調、共通性による協調という四つを考え、それらを各教科や道徳の学習のなかでどのように位置づけることが最適な創造的な学び方になるか、さらに、それをどのようにして子どもたちひとりひとりに発見させ、発展させるかを究明してきたわけです。3ヶ年間で一応の成果をえたとはいうものの、まだまだ多くの問題点を内蔵していることは明白です。読者の皆様の率直なご批判を賜りたいと思います。

この研究を進めるにあたって、本学の江淵一公助教授をはじめ多数の方々の一かたならぬご指導を賜ったことに対して深く感謝申し上げます。また、前三著に引続き本書の出版を快くお引き受けくださった明治図書、とくに編集部の江部満氏と樋口雅子氏に対して厚くお礼を申しあげる次第です。

昭和50年3月

福岡教育大学附属久留米小学校 校長 岡村 二郎